

カトリック 仙台教区報

2016年9月4日

No.231

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL <http://www.sendai.catholic.jp/>

いつくしみの特別聖年

2015・12・8～2016・11・20

一人ぼっちで苦しむ人に寄り添ったか。自分を傷つける人をゆるし、暴力を招く恨みと敵意の全てを捨てたか。わたしたちに対してこれほど忍耐強い神に倣い、忍耐したか。最後に、兄弟姉妹のことを祈りの中で主にゆだねたか。これらの「もっとも小さなもの」それぞれのの中にこそキリストがおられるのです。キリストのからだは、拷問を受け、傷つき、鞭打たれ、飢え、追われた姿として、再び新たに見えるようになります。それは、わたしたちが、それらがキリストのからだと感じ、心をこめてそれに触れ、そのからだを支えるためです。

(いつくしみの特別聖年大勅書 15)

仙台教区の復興支援活動は、被災者・被災地の状況に合わせて第1期・発災から6か月間の緊急避難所支援、

多くのボランティアの皆さま、様々な形でのご支援、日本のカトリック教会三教会管区、男女修道会・宣教会、教会関係の諸事業体・運動体などのご支援に心からの感謝を申し上げます。

仙台教区の復興支援活動は、被災者・被災地の状況に合わせて第1期・発災から6か月間の緊急避難所支援、被災地の復興支援は、相当長期



触れ合い・寄り添い「お茶っこ」タイム

はじめに

東日本大震災復興支援「新しい創造」第4期計画 — 「寄り添い 共に」 —

仙台教区長平賀徹夫司教は、2016年7月27日付で全国の皆さま宛に「新しい創造」第4期計画を発表しました。誌面の都合上、内容を抜粋して掲載します。また、太字は、編集委員会が大切なキーワードと思つたものです。原文は、各教会に届いていますので、「ご確認ください」。

第2期：仮設住宅団地への移行支援、第3期：仮設住宅から災害(復興)公営住宅への移行期、として展開してきまし

計画の期間

第4期計画は、2016年4月1日から2019年3月31日までとします。これは、災害(復興)公営住宅建設が遅れている岩手県の大槌町、山田町での完成予定が2019年3月末となっており、全ての災害(復興)公営住宅が完成する予定であるこの時を一つの区切りとしました。

社会・政治・経済などの状況が世界的に流動的で、変化の激しい社会にあつて、5年後、10年後の予測はなかなか立てにくいため、見通しができる3年間としました。

支援活動は、この第4期計画をもって終了するものと考えておりません。

生命の泉

先日NHKテレビで「ヒトラー最期の12日間」を見た。連合国の参戦でナチスは後退し、ソビエト軍は総統本部にまで迫っていた。そんな中でも狂気のヒトラーは勝利を信じ4人の秘書を採用した。その中にトラウドル・ユンゲがいた▼これまでもヒトラーばかりでなくナチスのことは多く知られているが、彼女の見た本部のヒトラー像を再現した映像で興味深かった▼1981年教皇ヨハネ・パウロ2世が来日して「戦争は人間のしわざです」といわれたが、これをわれら日本人はどう受け止めたのだろう。というのは、もし戦争が人間のしわざだとするならば、戦争を決定した当時の首相をはじめ中枢にいた人々の判断や人物像、議員たち国民の世論まで、また国内外の状況を日本はどう理解していたのか、戦争以外に道はなかったのか、また戦争を美化したり正当化せず冷静に見つめ今後に生かされなければならない▼靖国には明治維新以来「国安かれ」の一念で命を捧げた人々を「神霊」として祀っている。「神霊」となった方々を歴史の研究対象にはできない▼ヒトラーの人物像で興味ある本が出た。「彼はほぼきつかり56年の歳月で普通の人より少しばかり短い。つまり最初の30年はあやしい生活無能者として過ごし、その後にはわずかに田舎の大物政治家にのしかかり、ついに世界政治を動かすまでになった。：世界を舞台に暴れまわった後半生においても内実は無味乾燥でみじめなものだった。：この男の人生には人間の生活に重みや温もりや誇りを与えるものがまったく欠けている。学歴も職業もない。恋人も友人もない。簡単に投げ捨ててしまえるような人生だ。」そして「たえず自ら殺願望につきまといわれている」それゆえ国家を運営するにも官僚も内閣も後継者もつくらなかった『永遠不滅の私さもなくば混沌あるのみ』(セバスチャン・ヘフナー)▼「神は、自分に似せて人を造った」と聖書のいう人間とは「神と向き合う存在」であり、一人ひとり神と語り、生き方や考え方を学び、この世に生をうけたことの意義を追求しつつ生きるというものだ▼「人以前に国家や民族ありき」というのではこれからの時代、世界平和に寄与できるか▼第2次大戦で死んだ人は「5千万人を超え、ユダヤ人が収容所で殺害されたのは6百万人」と映画最後の字幕にあった。(守)

計画の基本的な考え方

1. 「谷間」に置かれた人々、弱い立場に置かれた人々に目を向け、その人々に寄り添って共に歩む。

2. 地元である仙台教区内の小教区が互いに協力し合い、これまで

に培ってきた地域の方々との関係を大切にしながら、長期にわたって持続可能な活動の仕組みを作る。

3. 被災地自治体・社会福祉協議会や関係団体などの連携を一層深め、地域のコミュニティ再生支援を活動の基本に据える。

4. ベース運営は、支援ニーズや支援内容の変化を踏まえた必要を見直しを随時行う。

5. 仙台教区サポートセンターは、①直轄ベースの運営や事務的なサ

ポート、②ニュースレターなどによる情報の発信、③全カリタスベ

ース、小教区を含めた活動グループの支援活動全体を俯瞰しながら相互の連絡調整などを担当する。

活動の内容

1. 仮設住宅に残されている人々や復興公営住宅に移った人々への支援

・ いまだ仮設住宅に残された人々への「お茶っこサロン」の継続により住民が集い、語り合う場を提供し、精神的ダメージのケアを続ける。

・ 復興公営住宅に移り住んだ人々の新たな地域コミュニティを作っていくかなければならない。これまで培ってきた住民の方々とのつ

ながりを活かしながら、自治会形成のサポート、「お茶っこサロン」などの求めに応じる。

・ 遊び相手が少なく、震災のストレスをかかえた子どもたちへのケアに取り組む。

2. 地域コミュニティ再生支援

・ ベース内外でのサロン活動やイベント、農業・漁業などの第一次産業の復興支援活動を通して様々な人々が出会い、交流しながら地域コミュニティの活性化、再生につなげる。

3. 福島県での支援

・ 津波被災と原発事故による被害を受けた福島県には、補償や放射能等についての考え方の違いによって住民の間に「分断」が生じ、

複雑な問題に直面し、傷

ついている方々がいる。地域の方々の状況をしっかりと理解し、ふさわしい支援を行う。今後、避難指示解除によって住民

の移動（帰還・自主避難の継続など）の形が多様化するにつれ、新たな支援が必要になると思われる。

これまでのベース、小教区、団体の活動経験を活かした支援へとつなげていく。

・ 視察や研修を通して、より多くの人々に福島県の現状を広く知ってもら

う。

4. 地元ボランティアの発掘

支援活動の中心を担うボランティアの人数は、年々減少しています。被災した方々に最後まで寄り添い続けることは、地元、仙台教区のひとりひとりの使命です。

これまで直接の支援活動に関わることができなかった方が、支援の輪に加わり、小さくとも一歩を踏み出せるよう、そしてこれまで精力的に活動続けてきた方々が今後も支援を続けていけるよう、仙台教区サポートセンターが中心となって支えていく。

むすび

教会が復興支援に取り組むことは、教皇フランシスコがおっしゃる「出向いていく教会」となることとつながります。それは、若者

司教日程

9月・10月

9・2 金 淳心会総長来訪

4 日 札幌教区創立100周年

13 火 司教評役・教区司祭団役

16 金 部差別人権委・事務局会議

18 日 第6地区大会（元寺小路）

19 月 広島教区司教叙階式

21 水 学法律事会

22 木 教区宣教司牧評議会定例会

23 金 東北塾

25 日 インターショナルミサ（元寺小路）

26 月 10・1 教区司祭団黙想会

3 月 子どもと女性権利擁護デスク

4 火 部差別人権委・定例会

7 金 特別臨時司教総会

11 火 司教評役・教区司祭団役

15 火 全国正平協脱核部会（八戸）

18 火 カリタス金石理事會

20 月 21 部落差別人権委・全国会議

24 月 福島ブロック会議

27 月 28 第39回 サポート会議

31 月 司祭団月例会

男女だれもができるいつもの祈りから始まります。大震災以来苦しい状況にある人々および支援活動に関わっている人々を祈りの中に包み、その方々の上に神の力強い助けが注がれるように願うことからです。復興支援活動を通して、カトリック教会は、社会のただなかに存在しているもの、その中で生きてこそ教会となっていく、という意識が育ってきていることを実感しています。

これからも、地元の人々、特に谷間に置かれた人々に寄り添い、神の恵みによって皆の思いがつながっていくように共に歩み続けていきたいと思っています。



「8月21日号 カトリック新聞第2面」

司教 平賀徹夫

カトリック新聞8月21日号第2面のトップに【性暴力、対応が課題—全教区参加で「集い」開催】という見出しの記事が載った。日本カトリック司教協議会の諸委員会の一つで、私も担当司教として関わっている「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」主催による7月19・20日の会合のことで、前もってデスクから日本の全16教区の司教に協力を願い、全教区から参加者が派遣されて開かれた。

1990年代、米国の教会で聖職者による子どもへの性虐待が次々と明らかになり、全世界のカトリック教会の大問題となった。教皇ヨハネ・パウロ二世のときからバチカンで大きく取り上げられてきたが、子どもへの性虐待や人権侵害の深刻な事例はカトリック教会の中で現在もお報告されるという実態があり、ごく最近もバチカンから各国司教協議会に対して「性虐待という重大な犯罪への対応や、被害者のケアのため教会がなにを行い、どのように寄り添うのか等を考え、その具体化にむけての提言と実践を求める」というような要請が届いた。

『教会憲章』に、「自分の懷に罪人を抱いている教会は、聖であると同時につねに清められるべきであり、悔い改めと刷新との努力をたえず続けるのである」とある（第8番）。「いつくしみの特別聖年」を過ごしている今、信仰を新たに、「教会は、復活した主の力によって強められ、内外からの自己の苦悩と困難に打ち勝ち、終わりの日に完全な光の中に現れるまで、主の神秘を忍耐と愛をもって忠実に世に表さなければならない（同）」という教えを実際に生きたい。

それにしても、と思う。仙台教区での性虐待（セクハラ）の訴えが少ないのは実際に無いからか、被害者が訴えることができないのか。それにもまして気になるのは、どうもパワーハラスメントではないかという話が少なからず耳に入ってくるのである。

地区だより

Ⅱ第1地区Ⅱ

青森本町・浪打・弘前
黒石・五所川原・松ヶ丘

第一地区として教区研修会が開けないか検討してきましたが、青森地区と弘前地区で別々に行うことになりました。

弘前地区では待降節黙想会を研修会としました。

2015年12月6日、ギャリー神父を講師に迎え、「フィリピンの家庭における私たちの信仰」というテーマで実施されました。内容は両親の役割として

①家族の絆を大切に考え、子どもたちに精いっぱい愛をそそぎながら信仰の心を育てる。

②内的生活を深めるために毎月家族で聖書を読み、祈りで信仰を深める。

③家族がそろって教会へ出向き、みことばと聖体による交わりを通して家族に息づく聖霊の大切さと



青森地区研修会

キリストの愛を受け入れる機会を与える。これらを具体的な例で話されました。

弘前教会では今年2月に帰天された佐藤初女さんの葬儀ミサがあり、それに関連した記事は地元新聞でも大きく取り上げられました。

青森地区では四旬節黙想会を研修会とし、2016年3月6日、首藤正義神父を講師とする講話がなされました。

詳細な資料と共に各信者の信仰生活こそが家庭における信仰の基盤であるとする講話を展開されました。

浪打教会での新たな試みとして、昨年の待降節から発足した「新入聖歌隊」があります。

新しいオルガンが納入されたことに感謝しつつ、浪打教会オルガンニスト矢野道子さんによる指導のもと、「よく祈ることのできる音楽」を目指して学んでいきたいと思っています。

第1地区全体として集まる機会が少ない中、6月19日、晴天のもと5教会（本町・浪打・弘前・五所川原・黒石教会）の第2回合同野外ミサがおこなわれました。（参加者140名）、場所は昨年と同様藤ホームでした。同時に藤の園の駐車場も借用し、広々とした会場で今年も実施出来たことは、恒例の行事だからという言葉で片付けられない関係者の努力があったからこそだと思います。



芝生の上での交流会

ミサは首藤神父司式で厳粛に行われましたが、その中で新しく第1地区に迎えたミゲル・ヴァレラ神父の紹介がありました。今後の活躍に期待いたします。

ミサの後、情報交換となり各教会の委員長からの発表がありました。

その後昼食となり「豚汁」がふるまわれ、広い芝生の上で交流の場ができました。文字通り第1地区が一つになった光景がそこに現れました。分ち合いの後、各自再会を期して成功裡に第2回合同ミサを終えることができました。

（浪打教会 金原 誠）

第5地区研修会・大会

7月3日、第5地区大会（於北仙台教会）が開催されました。

一年半ほどの準備をへて、やっと地区大会を迎えることができました。大会は午前中、第1分科会「朗読奉仕のグループ」、第2分

科会「聖歌奉仕のグループ」、第3分科会「侍者のグループ」、第4分科会「みことばの分ち合いグループ」、第5分科会「自由なグループ」の5つに分かれ、大会テーマである「家庭における私の信仰、ともに主の食卓を囲み、いつくしみを分かち合おう」の趣旨にそって、午後からのミサに備えるという形で進められました。参加者は、約180名でした。

第1分科会・朗読奉仕グループ

森田神父より、「霊的、典礼的、技術的準備をして奉仕することが大切」というお話を伺いました。正確に「読む」という技術にもまして、朗読者自身が「みことば」を味わうということが大切で、そのためには、心を落ち着け、朗読箇所を黙読し、第1朗読、第2朗読、福音の、それぞれのテーマを見つけ、3つの朗読のテーマの関連について気づくことが大切になってきます。

第2分科会・聖歌奉仕のグループ

「聖歌は神をたたえる歌、堂々と歌いましょう」と歌の指導だけでなく、歌の成立年代や歴史をも織り交ぜた楽しい1時間でした。

第3分科会・侍者のグループ

司教ミサのリハーサルを通して、侍者の動きを学びました。侍者奉仕が初めての参加者もありミサにおいて信徒が果たすこ



第5地区大会ミサ

とのできる役割の豊かさを学べるよい機会となりました。

第4分科会・分かち合いグループ

初めて分かち合いに参加した方もいたが違和感もなく入ることができました。よく準備された資料があり、初めに分かち合いのルールの説明があり、当日の福音の箇所が使われました。一人ひとりに働かれる聖霊の豊かさをその場で味わいました。

第5分科会・自由なグループ

50名余りの方々が集まってくださったものの、自由なグループということで参加者各自の自主性を尊重いたしました。最初にロザリオの祈りを一連二緒におささげいたしました。その後は三々五々集まった方々に自由な話し合いをしていただき、参加者の中で希望する方に感想を書いていただいて、ミサで奉納いたしました。

【第5地区通信】10号より抜粋
《第5地区教会》石巻・古川

塩釜・北仙台・東仙台



2016年 世界青年の日 クラフク大会

神のいつくしみを体験

仙台教区からニコ神父と2人の青年

ワールドユースデー(WYD…世界青年の日)大会がポーランド・クラフクで7月26日から31日まで行われた。大会テーマは、「憐れみ深い人々は幸いである、その人たちは憐れみを受ける」(マタイ5:7)。日本からは、青年や司祭・修道女127名が参加、さらに5名の司教も同行した。

WYDからの分かち合い コンディ・ニコラウス神父 第6地区担当司祭

遣のミサが行われました。

7月26日にWYDの開幕のミサが行われました。翌日によりき牧者小教区で日本の青年たちは司教によるカテケージスに参加し、アニメーション、分かち合い、ミサを行いました。28日晚教皇の歓迎式典、29日はフランシスコ教皇と共に十字架の道行、30日は教皇と共に晩の祈りをしました。翌日はWYDの閉会ミサ(派

フランシスコ教皇はこのWYDで青年たちに励ましと勇気を与えました。教皇のメッセージは、「イエスの愛の招きに応える青年。恐れることなく、イエスに向かって、心の底から『はい』と答え、主の招きに従いましょう。青年たちは自分の安全な場所に立つのではなく、出て行って、イエスの愛を伝えていきましよう。心地良いソファに留まっているのではなく、しっかりとした靴、さ

らにはスパイクシューズを履いて、イエス様の招きに答え、新しい地平へと向かって出かけるように。飢えている人、渴いている人、裸の人、病の人、家のない人と出会うために出向いていくように」。次に、「青年たちの支えは神様で！神様はありのまま青年たちを受け入れます。あなたは何者であるか、何者であつたか、何をしているか、何をしたか、神様は気にしない。神様はあなたがこれから広める愛と慈しみを見ている。神様はあなたを見守って、支えてくださるのです」。

世界を変えていきましよう！と教皇は呼びかけています。最後に、「青年たちは閉じこもらないように。神様は青年たちを必要としています。自分のところにいるのは簡単。しかし神様が求めているのはそのような生き方ではありません。外に出て、人々

に出会いましよう。それぞれの違いを乗り越え、平和のための対話を行っていきましよう。橋を造って手を広げて共に歩んでいきましよう」と、パパ様は青年たちに語りかけました。一人でも多くの青年たちがこのメッセージに忠実に答え、また神の慈しみが青年たちの心にとどまるように絶えず祈ります。

ワールドユースデーの体験

ジャーメイン・ラウ
(元寺小路教会)

WYDに参加するためのポーランドへの旅の準備をする時間を通じて、私は、父である神の慈しみの、多くの実例を経験しました。

神は私に、共同体として共に神の慈しみを体験するために、日本の青年たちと一緒に参加する機会を与えてくださいました。はじめは誰とも知り合いでは

なかったのに、彼らは友好的で親切でした。私は流ちょうに日本語を話すことができませんでしたが、私は、言いたいことを伝えるためにベストを尽くし、彼らも、私を理解するためにベストを尽くしてくれました。やがて、私は新しい友人たちを作り、個人的な体験を話すことができるようになりました。このことは最初は、私には難しいかもしれないと思っていたことでした。しかし、神はそれらのことを可能にし、それらのことを通じて神が私に慈しみをらせてくださるということを、私に理解させてくださいました。私は、素晴らしいグループの仲間たち、ホームステイのホストファミリー、そしてボランティアの方々に恵まれました。神は、本当に素晴らしいものを与えて下さいました。

私に、神の慈しみを理解さ



写真はニコ神父のFacebook から

せまでも一つの事例は、カテケージスの後の分ち合いの中にありました。私は、司教による説教を十分に理解することができませんでしたが、私たちのグループの司祭は、私に助言をくれるだけでなく、翻訳することも手伝ってくれました。分ち合いを通じて私は、グループの仲間たち一人ひとりが、悩みや重荷を背負っていることに気づきました。分ち合いにおけるメンバーたちの体験の証言は、私たち

子どもの祈りの集い

原町教会巡礼

原町ベース訪問

6月25日(土) 仙塩8教会教会学校の子どもたちの祈りの集いとして、原町教会への巡礼と原町ベースを訪問してきました。



私たちの力強い励ましをいただきました。信徒の皆さんにも温かく迎えていただき、大変感謝しています。また、原町ベースではベース長のSr. 島中の案内で小高、浪江、請戸をバスで巡るコースと、仮設住宅を訪問するコースの2コースを準備していただきました。シスターから放射能そのものについてや町の現状についてのわかり

一人ひとりに注がれる、神の愛と慈しみを、私に示してくれました。私が最も学んだことは、イエスを信じ、信頼すること、そしてイエスの慈しみは無限であり、私たち罪人にさへ向けられているということ、私のような罪人さへ、イエスの慈しみに値するということです。

最後に大切なことは、神は私たち一人ひとりをどれだけ愛しているかということ、思い出させてくださ



原町教会でのミサ

分たちの目で避難地区の状況を見たり、仮設の方々の集まりに参加できたことはとても貴重な体験となりました。

今回の訪問で終わりにせず、心を寄せるとはどういうことかを再度子どもたちや若い方々と考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

【参加した子どもの感想】

◆私の友達には小さい頃まで相馬の近くに住んでいた人や、震災のせいで小学生の時に引っ越して

いました。世界の百以上の国々からこんなにも多くの若者を二カ所に集わせた神のみ業は、教会がこんなにも普遍的であることを示してくださいました。それは、愛し、受け入れる教会です。WYDに参加した全ての青年への「橋を燃やすのではなく、橋を架けなさい」という教皇様の助言に耳を傾けましょう。

可能ならば、WYDに参加する機会をつかむことを、私は、全ての青年た

きた人がいます。この前、友達に南相馬に行ったことを話したら、福島に居た時のことで盛り上がりつつ、少しかわいそうでした。福島に行けなかったら、こんな感情は持たなかったと思います。(中1女)

◆私は原発のことをニュースでしか見たことがなかったけれど、今の福島の現状が分かりました。震災から5年の今年になっても避難生活をしている人の苦しさや、バスの中で見た津波の跡が残っていたのがとてもつらいことだと思いました。(中1女)

「いつくしみつて、なかに」 仙塩地区8教会 教会学校 サマーキャンプ

仙塩地区8教会の教会学校合同のサマーキャンプは、仙中市青葉区青野木の「ドミニコの家」にて、いつくしみの特別聖年になんだ「いつくしみつて、なかに」をテーマに、8月10・11日の1泊2日間で行われました。



ツリーハウスで

従来の2泊3日を短縮したのは、費用と日数を抑えることで少しでも参加しやすくする狙いでしたが、今年から祝日となった11日「山の日」と重ねたため、その日の様々な子どもたちの行事とかぶってしまったことは計算外でした。そんな中でも、11日にピアノの発表会があるにもかかわらず初日だけでも最後のキャンプに参加してくれた6年生や、遠い他教区から仙台の祖父母宅に帰省中に参加してくれた子たちなど、総勢16名の小学生が参加し、全員が十分に仲良くなりました。

今年のキャンプ最大の収穫は、近隣の赤坂ニュータウンの壮年の方々でつくるNPO「里山ネット赤坂」のご協力で、手作りのツリーハウスで遊んだり、その近くで縄文遺跡を発掘中の東



手話を交えてのミサ



7月16日から17日まで白石教会で、7人の子どもが参加。みんな「5つのパン」と2ひこのさかなの絵を描いた。

仙南地区のサマーキャンプ

仙塩8教会中高生会 サマーキャンプ ドミニコの家

仙塩8教会中高生会は、8月14日～15日、ドミニコの家にてサマーキャンプを行いました。今年は日帰りも含めて10名の中高生が参加してくれました。毎食、もりもり食べて、夜はバーベキューと花火を楽しみ、心ゆくまで仲間たちと語り合う楽しいひとときとなりました。

もちろん、楽しく遊ぶだけではなく、信仰について学び、分かち合う時間もあります。

1日目には「召命について考えよう」というプログラムを設けました。中高生会担当司祭のニ神父から司祭召命について、マリアの宣教師フランシスコ修道会のSr.内田から、修道召命について、そしてリーダーから、信徒



自然の中でのびのびと

ました。2日目には「聖書を読もう」という、みことばを味わう時間を設けました。ヨハネ福音書15章9～15節「互いに愛し合いなさい」の箇所を読み、書き写し、自分の気になる箇所を見つけ、どこが気になったか、それはなぜかを発表し、皆で分かち合いました。

そして、今回の

キャンプは多様性のお恵みに満ちあふれていました。日本、韓国、インドネシア、フィリピン、シンガポールという、多様なルーツをもつ仲間たちの集まりで、日本語、英語、韓国語が飛び交っていました。さらに、リーダーにも中高生にも、教会に来ること自

この世が決して与えることができないもの

「平和ってなんですか。」小学2年生の男子に質問された。平和とは、戦争をしないということだけではなく、「あなたたちに平和があるように」という復活したイエスの言葉を改めて問い直す機会となった。その矢先に、ミサの説教の中で、「私が与える平和は、この世が決して与えることができないものである」と、最後の晩餐でのイエスの言葉が飛び込んできた。世が与える平和は考えたことはあっても、世が与えることが出来ない平和を考えたことはあったらうか。

フランシスコ教皇は、『ラウダート・シ』の中で次の世代を担う子どもたちのためにかけがえのない地球を保持するよう警告とエールを送っている。

最近の日本では、地下鉄の中で、緑の公園で、病室の中でさえも人々はスマホを見続けている。私たちは何を見つめれば、この地球を大事にし、イエスが十字架を通して私たちにもたらしてくれた、この世が決して与えることのできない「キリストの平和」を日々生きることができるのか。その眼差しの行方が問われている。

地球を大事にする会 Sr. 佐藤 廣子

アカペラ(cappella) ③ 所有と共有

元寺小路 白石 裕

複数あるものを分けるとき「等分に分ける」、普通これが公平な分配方法とされている。厳密に言えば受け手の必要に応じた重みを付けた分配が最も公平でしようが、重みを公正に見積もる方法が難しい。そこで全ての重みを等しいとして平等にします。ところで逸話の場合、分配するものは一着のマントです。分割できない1個のものの分配は、常識的には「ある」と「ない」の分配になります。この状態はどちらに転んでも公平とは言えないでし

しょう。

分割できないものを平等に分配しようとするなら、共有になるでしょう。つまり、「必要に応じて必要とする人が臨時に所有(使用する権利)としての分配です。でも、そのような共有が可能な場合は、何等かの共通な関係をもつ仲間内に於いてのみ成り立ちます。分割不可の1着のマントを「裂き分ける」には発想の転換が必要で、私にはとても及ばない発想です。分割共有はいままで無関係であったところに、共通基盤をもつ新しい関係を創出することを意味します。

に与える」と本質において同じです。マルタンの行いをキリストがよしとした本質はそこにある、と私は思います。なお、「聖体拝領」という言葉では分かり難いですが、英語の「communion」は「common(共通の、共有の)」から派生しており、共有の概念が基礎となっています。楽器を使わないアカペラでは全員が声と感性によって演奏に参加します。ピタッと合うと自分の声はなくなり、ハーモニーの中に溶け込みます。ハーモニーの共有、そこにアカペラの醍醐味があります。



召命についての勉強

体が初めてのメンバーがいました。それでも私たちは、紛れもなく、一つの仲間であり、共同体でした。むしろ、違っていることがこの共同体のすばらしさを形作っていました。



2日目の「聖書を読もう」

担当司祭のニコ神父、前日に移動のお手伝いをお願いしたら、ほぼ全日お付き合いくださった小野寺神父、一週間前に講話を快諾してくださったSr.内田をはじめ、お手伝いくださった全ての方々に、そして何より、キャンプの間共にいてくださった主イエスに心から感謝いたします。

第1回「いのち」シリーズ勉強会 カトリック正義と平和仙台協議会

今、福島で： 子どもの甲状腺がん

カトリック正義と平和仙台協議会では、「いのち」に関する様々な分野の方々からお話を聞く勉強会を開催し、「いのち」の大切さを学び、考えようとシリーズとして行うこととした。

その第1回が、8月11日（木・山の日）元寺小路教会で開催され、約30人が参加した。

3月の「いのちの光3・15フ

クシマ」での講演会で、好評だった布施彦先生（ふくしま共同診療所所長）をお招きして、現在福島で医師として医療に携わる中で感じておられることや、現状などをお聞きした。

今、福島で問題となっていること

① 小児甲状腺がんの多発

福島県内の医師は、福島第1原発の放射能は、チェルノブイリ原発事故の6分の1程度だから健康被害はありえないとの立場で、検査さえしてくれない。

しかし、チェルノブイリでは、事故の5年後から10年後にかけて小児甲状腺がんが多発している。福島でも、これから増える可能性がある。

② 高濃度汚染水の海への放出

凍土壁で、流出を防ごうとしても、うまくいっていない。



③ 「中間貯蔵」という名の「永久貯蔵」

除染で出た土砂などが、フレコンバックに詰められて、積み上げられているが、バックの劣化によって、汚染物質が漏れている。永久貯蔵施設建設の見込みも無く、いまだに野ざらしになっている。

④ 第1原発の廃炉作業と労働者の被曝、廃炉作業は、高い放射能のために、計画通り進んでいない。原発労働者が、許容量の放射線を浴びるとそれ以上働けないため、ベテランの作業員がどんどん減っている。

今は、素人の労働者で能率も上がらない。⑤ 復興という帰還と被曝の強制策

除染が終了し、放射能の危険が低下した地域については、帰還促進の政策がとられ、公立学校の再開など、子どもも含めて帰還させることが、町の復興につながるとしている。

しかし、放射能のホットスポットが至る所にあり、安全性には疑問がある。大人の放射能被曝は、年間100ミリシーベルトまで許容されるとしても、子どもは、許容量0である。

にもかかわらず、県外への自主避難者に対する補助金は、来年3月で打ち切ることになっている。

⑥ 小さい子どもを抱えている母親の悩み

今、福島県内で、放射能問題について話すことはタブーとなっている。

ふくしま共同診療所へ来るのも他の人に知られないようにしなければならない。

当診療所では、避難できる人は避難すること、それが出来ない人は、放射能の心配のない所に数日間でも保養することを勧め

ている。保養することで、体の放射線量も低下するし、母親も精神的に楽になれる。そのうえで、医療を受けることを勧めている。

今後、放射線による小児甲状腺がんは増え続ける。それ以外の様々な病気も増えている。国が進める帰還強制政策には反対。子どもの安全を守るための費用は、全て国と東電が支払うべきだと先生は強調した。

「恵みの言葉を伝えて80年」 「聖ドミニコの贈りもの」 仙台ロゴス講座

第28回仙台ロゴス公開講演会が、7月24日、カトリック北仙台教会信徒館に於いて開催され、およそ70名が参加した。



講師の井原彰一神父（聖ドミニコ会士）は、大

学時代に北仙台で受洗した経緯もあり、「ここで話ができることはとても懐かし、光栄だ」として、映像を映しながら聖ドミニコについて話された。

「講演の概要」

聖ドミニコはキリストのみことばを宣べ伝え、一人でも多くの人の魂を救いたい、この事に熱中していました。

彼は裸足で町から町へと行脚しながらみことばの真理を宣べ伝えて行っただけです。

やがて、1216年12月22日に聖ペテロ大聖堂でホノリウス三世から会の創立が認可され、ドミニ



講演に聞き入る参加者

コ会（正式には「説教者兄弟会」）が誕生したのです。

信仰を伝えるため、説教の大切さを痛感していました。まさに巡回説教者でした。その行動は祈りの中から力を得ていたのです。

聖ドミニコは自分の使徒職を果たしながら、次の9つの祈りを行っていたのです。

① 謙遜な祈り ② 罪人としての祈り ③ 償いの祈り ④ 清めの祈り ⑤ 神に披ひられる祈り ⑥ 特別なカリスマを願う祈り ⑦ 聖霊の賜物を受け取る祈り ⑧ 潜心する祈り ⑨ 旅路における祈りです。

この祈りの中から福音を宣べ伝える勇氣と力を汲み取り、またみことばに関する深い洞察を身につけることができたのです。

この様に聖ドミニコにおいては、観想と活動が渾然一体となっており、活動が祈りであり、祈りが活動なので、活動は祈りのあふれなのです。聖ドミニコのカリスマは、観想してそのあふれを他の人々に伝えるということなのです。

聖ドミニコの人格的な成熟

① 広い自己、自己中心から解放 ② 自由と責任 ③ 人間の本质に対する寛容と受容 ④ 人間の多様性に対するゆとり ⑤ 創造性、積極性

⑥ 主体性 ⑦ ユーモア ⑧ 客観性や適切な判断能力 ⑨ 民主的な性格構造 ⑩ 自己の使命を自覚し、確固とした内的統一感をもっている ⑪ 神秘的なものの受容です。

ドミニコの人格のあり方をみても非常に成熟した人間であつたと分かります。

（豊屋丁教会 山田 務）

舟山亨神父一周忌追悼ミサ

会津若松教会

7月31日(日)、会津若松教会のミサは、久しぶりに聖堂が人々でいっぱいになり、隣の小聖堂にも人が集まった。午前11時より、平賀司教の司式によって、舟山亨



神父の一周忌追悼ミサが行われた。ご遺族・ご親族や、自衛隊時代のご友人など、そして、会津地区の3教会の信者たち、さらに遠く横浜や京都からもお見えになった方々、皆、一様に心に去来する生前の舟山神父を偲びながら、敬虔な気持ちで司教の言葉の一つ一つをかみしめていた。

ミサの後は司祭館の談話室に移動して、昼食をいただきながら、舟山神父の生前の姿やご活躍のことなどについて、様々な話題に満ちあふれて、すばらしい交歓のひと時となった。

舟山神父様、どうぞ天国から、

告知板

◆平和のための脱核部会 in 青森集会

～福島が問いかけること 私たちの生き方～

日時：2016年10月16日(日) 10:30～16:00

場所：カトリック八戸塩町教会(イメルダ幼稚園隣り)

(八戸市柏崎4-14-40 TEL 0178-22-2228)

申し込み：不要 参加費：無料

10:30～主日のミサ ロワゼール神父(八戸塩町教会)

光延一郎神父(イエズス会)

13:00～講演会 今中哲二氏(京都大原子炉実験所元助教)

六ヶ所、東通に原発関連施設を抱えるここ青森から福島の今に向き合い、これからの生き方を一緒に考えてみませんか。

原発の危険性を指摘してきた研究者集団 京都大学原子炉実験所「熊取の6人組」の一人で、チェルノブイリ原発事故の災害研究の第一人者・今中哲二さんをお招きし、お話いただきます。

主催：日本カトリック正義と平和協議会

◆仙台聖パウロ書院閉店時間変更のお知らせ

10月1日から平日の閉店時間は、17時になります。

平日：10時半～17時 日曜日：9時半ミサ後～15時

定休日 月曜日

◆第29回仙台ロゴス公開講演会 10月10日(月)13:30-15:30

講師 本田哲郎神父(フランススコ会)

演題「釜ヶ崎で福音書を読む」

会場 カトリック北仙台教会 信徒会

地上を歩む私たちを守り導いてください。

舟山亨神父は、昨年8月1日、会津若松教会の樹木の伐採作業中の事故で

帰天(51歳)。会津若松 佐藤大

仙台教区司教座聖堂 献堂記念ミサ

元寺小路教会は、今年で設立139年を迎える。聖ペトロ・聖パウロを守護聖人とする当教会は、6月26日(日)平賀司教司式による献堂記念ミサがさげられた。平賀司教は説教の中で、聖ペトロと聖パウロの生涯、信仰生活に触れ、ペトロの三度の否みとパウロのダマスコでの「主との出会いと回心」について話された。

計報

スール・マリ・ジェンマ・ドウ・ラ・サント・ファミリ・O.P.

山形 知子

1931年1月5日生

2016年8月3日 帰天

85歳7ヶ月



1967年10月10日 初誓願、1973年10月13日 終生誓願、修道誓願48年10ヶ月。

外務の多方面にわたる仕事を責任ある立場で、目配り気配りを十全に果たし、更に来客の方々に暖かい心で接し、皆さんに喜ばれました。又その愛らしい微笑みにひかれて修道院に入会した姉妹もありました。ドライバーとしての腕前も相当なもので、慎重で、機転が利き、外見からはうかがい知れない胆力の持ち主でした。

新刊紹介

回勅 ラウダート・シ

ともに暮らす家を大切に

教皇フランシスコ

FRANCISCI

LITTERAE ENCLICAE

LAUDATO SI'

DE COMMUNI DOMO COELESTIS

わたしたちは、環境危機と社会危機という深刻な二つの危機に直面している。この二つの危機は、互いに密接に関連しており、社会的にも環境的にも深刻なものである。この二つの危機は、人類の未来を脅かしている。この二つの危機は、人類の未来を脅かしている。この二つの危機は、人類の未来を脅かしている。

回勅 ラウダート・シ

「ともに暮らす家を大切に」

著者 教皇フランシスコ／訳者 瀬本正之、吉川まみ／発行 カトリック中央協議会／定価1400円＋税
昨年の5月聖霊降臨の主日に発表されたこの回勅が出されてから、これほど日本語出版が待たれていた回勅はなかったのではないでしょう。この回勅を読んで、期待を裏切らない内容に満足するとともに、「ともに暮らす家」である地球を大切にしなければ、という教皇の訴えが胸に響いています。
アッシジの聖フランシスコが歌った「太陽の賛歌」から取られたこのタイトルは、「わたしの主よ、あなたはたたえられますように」を意味しています。フランシスコがたたえた地球が、今どんな状態に置かれているのかを歴代教皇の公文書を引きながら、『皆がともに暮らす家』を保護するという問題を切迫した課題として、教皇は私たちに指し示します。

編集後記

リオ・オリンピックも終わった。日本のメダル獲得は、史上最高の41個と予想以上に多く、懸命にプレイする選手の姿が感動を呼んだ。ヨーロッパや南米の選手たちの中には、プレイの前後に十字を切ったり、天に向かつて何やら祈りをささげたりしている姿が見られた。アスリートとしての生きかたの中に信仰が息づ

いている様子が見られた。今年の夏は、ことのほか暑かった。そんな中でも、子どもたちは元気いっぱい、キャンプや合宿で遊び、祈っていた。青年や、子どもたちは、これからの仙台教区を支えてくれる宝として大切に育てたい。

教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』は、地球の環境から国際政治まで踏み込んでいる。必読書にしたい。

第一章は、汚染、水問題など、環境問題に関する最新の科学的成果を要約し、この「家」に起きていることに、私たちの目を向けさせます。第二章は、聖書の「創造の福音」から自然や環境問題に関して人間に負わされている責務について取り上げています。第三章は「生態学的危機の人間の根源」と題し、まず、テクノロジーについて考察し、労働問題と科学の進歩の限界について取り扱っています。第四章は「総合的なエコロジー」という言葉を用い、この回勅で提案している中心に触れています。第五章「方向転換の指針と行動の概要」では、私たち一人ひとりの回心に止まらず、国際政治、国際社会を巻き込んだ対話と解決策の実現を求めています。最終章の第六章は「エコロジカルな教育とエコロジカルな霊性」を述べた。この回勅が私たちに呼びかけている回心には、教育が必須であり、学校、家庭、メディア、要理教育などの場で行われなければならないと、具体的な教育を勧めています。さらに、キリスト教の豊かな霊性の中には、エコロジカルな霊性があることを思い出させてくれます。